

教育・保育目標		あふれる笑顔、つながる心、たくましく育つわかば
重点目標		人とのつながりを大切にし、心も体もたくましさを備えた笑顔のあふれる子どもを育成する

項目		重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価
学 力 の 向 上	保育の実践	主体性を はぐくむ 遊び環境	・月1回職員研修を行い、子どもの姿を共有し、主体性を育む保育について学び合う。 ・定期的に会議（乳児・幼児）を行い保育内容について話し合う。 ・子どもが自ら遊び出し、遊び込むことができる環境作りを行う。 ・自園の実態に応じた教育課程の編成ができるように、学期に1回教育課程の見直しを行う。	・保護者アンケートにおいて、「子どもは楽しく園生活を送っている。」「こども園は、子どもの発達や興味関心に応じた保育を行い、子どもの意欲や主体性が育まれるように努めている。」と回答した割合がそれぞれ70%以上になる。 ・子どもの主体性を大切にした保育展開が計画的に行える。 ・自園の実態に応じた教育課程に沿った教育保育を行える。	B	・保護者アンケートで70%以上の肯定的な回答があり、一定評価された。 ・月1回の職員研修では、少人数のグループで話し合うことで日々の保育活動について具体的に協議することができた。 ・子どもの主体性を育むための保育を計画的に行う点については、職員それぞれの経験から頼るところが少なかった。 ・期ごとにそれぞれの学年で教育課程の見直しを行うことができた。	・今後も職員間の協議を定期的にもち、主体性に対する共通意識で保育環境を作っていく。 ・子どもの実態に即して見直した教育課程に基づき主体性を育む保育計画の立案を行う。 ・保育実践を職員間で省察しあい、保育者の専門性を磨いていく。	・乳児と幼児では遊びの環境作りも大きく異なる事と思います。職員の皆さんがそれぞれのお立場で知恵を出し合って、より良い環境づくりに努められていると感じています。
		自然環境 の活用	・草花、樹木、落ち葉、小虫等、四季折々の自然物や生き物が育つよう園庭環境を整備する。 ・自然物に興味関心をもったり取り入れて遊んだりできるよう、保育環境を工夫し計画的に保育に生かす。 ・季節に応じた野菜を栽培し収穫して食す。	・保護者アンケートにおいて、「こども園は、子どもの豊かな感性を育むための自然環境を工夫して整えている。」と回答した割合が70%以上になる。 ・子どもが自ら、葉や花、枝や枯葉等の植物を使って遊びに取り入れたり、生き物を見つけて関わったりする等、自然とふれあう姿が見られる。 ・季節に応じた野菜の種まきや苗植え、収穫が計画的に行える。	B	・保護者アンケートで90%以上の肯定的な回答があり、一定評価された。 ・講師招聘園内研究会を行い、職員の自然物に対する理解を深めることができた。 ・子どもが自ら遊びに自然物を取り入れられる環境を整えてきたが、単発的だった。 ・栽培した野菜を調理と連携して食すことができたが、育てる過程を保育に活かせなかった。 ・花壇の土づくりを行ったり季節に合わせて植栽に取り組んだりと適時手入れを行ったが、新設のため土壌の豊かさが恵まれず、園庭の木々や植物の生長は良好ではなかった。ビオトープは、オタマジャクシやヤゴが発生し、子どもが生き物と触れ合う機会となったが、維持管理の困難さが課題となった。	・園の自然環境を豊かに維持していくための取り組みについて職員間で協議し、植物の種まきや移植、肥料やり、小虫が生息する環境づくり等、計画的に行えるようにする。 ・幼児と共に環境づくりが行えるよう保育計画を立てる。また栽培については、食すだけでなく生育過程も保育活動に取り入れられるよう、栽培の年間計画を立案し実践する。 ・ボランティア等、地域の協力者を探す。	・伊丹市幼児教育ビジョンの3本柱の1つである、自然環境が充実した初めての園であり、職員の方も手探りの状況だと思っています。そのような中、教育委員会を始め全ての市長部局からのサポートも必要と考えます。地域としても前向きに対応したいと思います。
豊 か な 心・健 や か な 体	自分も人も大切に する子どもの育成	互いの よさを 認め合う 保育	・子どもが、自分は大切にされていると感じられるよう、一人一人に愛情深くかわかる。 ・自尊感情が高まるよう、個々のよさを大切にし、子どもの気持ちや考え、行動等を尊重した保育を実践する。 ・異年齢、同年齢等、様々な関係性で交流できる場を整え、関わりがもてるようにしていく。 ・クラスや学年での会議や、職員会議を月1回以上行い、子どもの育ちや保育について話し合う。 ・人権に関する職員研修、保護者研修をそれぞれ年1回以上行う。	・保護者アンケートにおいて、「保育者は、子どもに愛情深くかわっている。」「こども園は、子どもに自分を大切にすることや、他の人への思いやりが育まれるよう教育・保育に取り組んでいる。」と回答した割合がそれぞれ70%以上になる。 ・異年齢、同年齢等、様々な関係性で遊んだり過ごしたりする姿が見られ、関わり合いの中で相手を肯定的に捉えている言葉や行動が多く見られた。 ・個々の子どもの育ちについて職員間で情報共有を行い、保育計画の見直しとよりよい実践が行える。 ・保育者自身の道徳性を常に振り返り、人権意識を高める。	A	・保護者アンケートの両設問で95%以上の肯定的な回答があり、一定評価された。 ・戸外遊びの時間を共有したり、クラスを超えて一緒に生活したりする中で関わり合いが見られ、子ども同士の会話では肯定的な言葉や行動が見られた。 ・乳児会議、幼児会議、職員会議等でそれぞれ月1回以上、子どもの育ち等の情報を伝達共有し、保育者の関わり方や保育計画の見直しに取り組んだ。 ・職員の人権研修を実施したり保育を語り合ったりする中で、子どもの人権が常に尊重されているか確かめ合い、職員自身の人権意識を常に振り返ってきた。	・引き続き、職員会議等で子どもの情報を共有し、人権尊重の視点でクラス経営のあり方や保育計画の見直しを行う。 ・人権研修に参加し、また園内研修も行い、保育者としての人権感覚を磨いていく。 ・子どもの関係性を丁寧に読み取り、一人一人が集団の中で尊重されて園生活を過ごしているかを意識して保育にあたる。	・アンケート結果からも分かるように、子ども達に接する職員の対応には満足しています。子どもの育ちの基本には人権に対する考え方が大きいと思います。人を育てる原点に力を入れている様子がうかがえます。
		健康な心 と 体を育む	・生活習慣を意識したり自らの健康や心身に関心をもったりできるよう、「ほけんの話」で伝えたり生活習慣に関する絵本や視覚教材等の環境をつくったりする。 ・給食で提供する食材に興味をもてるよう、季節に合わせて旬の食材に関する掲示を行う。 ・子どもが自ら体を動かして遊びたくなるよう、室内外の環境や教材・遊具を工夫しながら活用する。	・保護者アンケートにおいて、「保育者は、子どもの基本的生活習慣が身に付くように、個々に応じて関わっている。」「子どもは、こども園の給食を楽しみにしている。」「子どもは、こども園での遊びを通して体を動かして遊ぶことが好きになったと感じる。」と回答した割合がそれぞれ70%以上になる。 ・「ほけんの話」を季節や発達段階を考慮し必要に応じて定期的に行う。	B	・保護者アンケート三設問共に70%以上の肯定的な回答があり、一定評価された。 ・子どもが生活習慣を意識して自ら取り組めるよう、イラスト等を用いた視覚教材を作成して表示し環境を整えたことで、子どもが進んで実践していた。 ・「ほけんの話」は、4.5歳児に1回程度しか実践できなかった。 ・給食で提供する食材や栽培している野菜等、その時期の旬の食材を掲示したことで、子どもの関心につながった。 ・子どもが自ら体を動かして遊びたくなるような環境設定を行うことができた。	・今後も「ほけんだより」や絵本、視覚表示を通じて生活習慣や健康に関する情報等を周知し、家庭と連携して乳幼児の生活習慣の確立を目指す。 ・生活習慣の必要性を伝える場となる保健指導の内容や時期について、園児の実態に合わせて検討し実践に取り組む。	・給食時の食材や遊びの時に使う道具など、視覚や嗅覚を育ちの中で活用することは、重要だと思います。「ほけんの話」を子ども達と一緒に聞いてみたいです。
開 か れ 信 頼 さ れ る 学 校 園	安心・安全な園づくり	危機管理 の徹底	・年度当初にアレルギー児、与薬対応マニュアル、避難訓練マニュアルと年間計画を作成し、共通理解する。 ・年度当初にリスクマップを作成する。また、月に2回、複数職員で安全点検を実施し、危険箇所発見時は速やかに改善する。 ・一斉メールを活用し、緊急時に子どもを保護者へ引渡す訓練を年1回行う。 ・日常の保育の中で危険な行為について発達段階に応じた指導を適時行う。	・アレルギー児には毎日、職員間で成分表を確認し、個々の状態に即して提供できるようにする。 ・月1回、火災や地震等を想定した避難訓練を実施し、反省や課題を踏まえ、その年度マニュアルや計画を見直ししていく。 ・破損や危険箇所の改善が迅速に対応できる。 ・保護者アンケートにおいて、「こども園は、災害等の発生に備えた避難訓練や施設・遊具等の安全点検を定期的に実施し、子どもの安全に関して適切な対応を図っている。」と回答した割合が70%以上になる。 ・発達段階に応じて安全な過ごし方や遊び方が身につくようになる。	B	・保護者アンケートで95%以上の肯定的な回答があり、一定評価された。 ・各マニュアル通り遂行し、実態に即してその都度見直しを図ったが、アレルギー児については、クラスを超えた共通理解が欠けていた事があった。 ・避難訓練は計画通りに実施できた。また毎回の反省から本園の実態等に即したマニュアルとなるよう繰り返し検討することができた。 ・月2回の安全点検で担当が即座に修繕した。大規模な箇所は報告を行い、職員で改善を図ったり業者対応を依頼したりすることができた。 ・発達段階に応じた環境をそれぞれに整える中で、職員の安全管理意識が不足しリスクに繋がる事があった。	・各マニュアルは、実態に即しているか、全職員の共通認識となっているか等、定期的に協議や見直しを図る。特にアレルギー児への対応は、職員会議で十分に確認を行う。 ・職員の安全管理意識が高まるよう、園の生活環境に潜むリスクについて共通認識する場を定期的に設ける。 ・安全な過ごし方について声を掛けあうことができる力を子どもが身につけられるよう、発達段階に応じた安全教育を行っていく。	・以前テレビで紹介されていたが、地震の時に幼児が覗きよりも早くテーブルの下に潜り込んだのを見て、親の一言は「三つ子魂100万」でした。幼いころの訓練は非常に効果が大いだと思います。危機管理にはアレルギー対応も含まれる事を改めて認識し、職員の方の大変さを実感しました。 ・小学校や地域と連携した防災・避難訓練の実施について検討してほしい。
		園情報の 発信	・月1回クラスだより、連絡帳、写真掲示等を用いて教育保育の可視化を図る。 ・月1回以上ホームページを更新し、日頃の様子や、園の情報を発信する。	・保護者アンケートにおいて、「こども園は、こども園の情報を園だよりやクラスだより、連絡帳、写真掲示、ホームページ等を通じてわかりやすく保護者に伝えている。」「わかばこども園ガイドで知らせている教育・保育目標は適切である。」と回答した割合がそれぞれ70%以上になる。	A	・保護者アンケートで両設問共に90%以上の肯定的な回答があり、一定評価された。 ・保育の可視化が計画通りに行え、教育・保育目標の理解を得ることに繋がった。 ・ホームページは月1回以上の更新が行えた。	・教育保育内容の細やかな情報発信が行えるように全職員で考え、取り組んでいく。	・地域の人、特にお年寄りにはHPは遠く紙文化がまだまだ残っています。園便りなどは地域で回覧しますのでお声がけください。
		子育ての 支援事業	・保護者対象の保育参観を2ヶ月に1回以上、学級懇談会を学期に1回、個人懇談会を年2回実施する。 ・保護者や地域の子育て家庭を対象に給食試食体験、育児相談を実施する。 ・地域の子育て家庭を対象の園庭開放や施設見学を実施する。	・保育参観、学級懇談会に7割以上の保護者が参加する。 ・保護者アンケートにおいて、「こども園は、『子どもが心身ともに健やかに成長してほしい』という保護者の願いに応えている。」と回答した割合が70%以上になる。 ・園庭開放や施設見学の参加人数がそれぞれ100名を超える。	B	・コロナ感染予防対策にあたりながら、できる範囲での子育て支援事業を行った。 7割以上の保護者が参観や学級懇談会に参加した。 ・保護者アンケートで95%の肯定的な回答があり、一定評価された。 ・園庭開放や給食体験はコロナ感染予防対策の為実施できなかった。施設見学はコロナ対策の為定員を制限し回数を増やして対応した。180名程と多くあった。	・コロナ感染予防対策の中、地域の子育て家庭を対象とする取り組みが課題である。	・コロナ感染予防対策の中、特に園庭開放や給食体験が出来なかったことは、致し方ない事だったと思います。在園児の保護者からの評価は良かったようです。
園 庭 活 動 の 推 進	地域に根ざした	にじいろ 保育 拠点園の 推進	・にじいろ保育の拠点園として、にじいろ広場を開催し小集団で体を動かす遊び等を通して一人一人の発達への支援を図る。 ・にじいろ保育の拠点園として、インクルーシブ教育・保育の推進と情報発信をする。 ・園における個別の支援に加え、必要に応じて専門機関や外部機関との連携を図る。	・にじいろ広場を年間6回実施し、参加する子どもが各回10名以上となる。 ・拠点園としてブロックの園に大型遊具、教材、本の貸し出しを行う。 ・保護者支援として保護者の相談を受けたり、情報提供を行ったりする。 ・インクルーシブ教育・保育（個別の支援や合理的配慮等）について、保護者や職員の研修をそれぞれ年1回実施する。	A	・にじいろ広場を計画通りに開催し毎回13名以上の参加者があった。また民間施設からの見学者も複数あり、拠点園としての役割を歩前進できた。 ・他園に貸し出しの案内を行ったが、希望はなかった。 ・保護者支援は本園の保護者には行えたがコロナ禍で他園へは実施できなかった。 ・研修内容はコロナ禍のため書面等を通じて職員へ報告内容を周知した。各自の研鑽に繋がった。 ・必要に応じて専門機関や外部機関との連携を行った。	・保護者支援について各園の情報を共有すると共に、コロナ禍で行える方法を検討する。 ・大型遊具等の貸し出しを、各園が利用しやすいよう、遊具リストを作成する。 ・インクルーシブ教育・保育（個別の支援や合理的配慮等）について職員研修を行い、専門性を磨いていく。	・わかばこども園は拠点園としての役割も大きく、幼児教育ビジョンでもその重要性は謳われており、コロナ禍に於いてその役割を果たしていると感じました。 ・コロナ禍においても関係機関と連携を図りながらにじいろ保育の拠点園としての役割を果たした。

学校関係者評価総括
・保幼小連携の視点に立ってカリキュラムを見直し、地域ぐるみで子どもの健全育成をめざしていただきたい。

次年度に向けた重点的な改善点
・職員間の連携と学び合いの組織体をさらに強化するとともに、関係機関とも連携を図りながらより良い保育活動の実践に取り組む。